

フィクションから知っていく現実もある！

2022年2月

眞鍋由比

今年の上半期の直木賞は米澤穂信『黒牢城』と今村翔吾『塞王の楯』になりました。私はかなり逢坂冬馬『同志少女よ、敵を撃て』ハヤカワ書房2021 に期待していたので少しがっかりしました。かなりアニメチックで、キャラクターなどが少し背景不足の部分があるかもしれませんが、抜群に面白かった。独ソ戦を少女狙撃手からみて描くというのは今までにない視点で、「兵士の心情に迫る上で精神的原作になった」とされたのが、2015年にノーベル文学賞を獲ったアレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』岩波現代文庫 2016。これはマンガにもなって、うちの図書館では小学生にすら借りられているベストセラーです。美少女系のキャラクターに違和感を感じる人もいるでしょうが、そうでなければ内容の深刻さに押しつぶされてしまいそうになる。マンガを入口に読んでもらえたら、と思います。

『戦争は女の顔をしていない』 〈1〉～』

アレクシエーヴィチ，スヴェトラナ【原作】/小梅けいと【作画】/速水 螺旋人【監修】
KADOKAWA2020～
2巻まで所蔵中。3巻が3月に刊行予定。

2700万人もの死者を出した独ソ戦（1941～1945）。日本の日中戦争から太平洋戦争（1937～1945）までの死者が310万人というから約9倍もの死者を出す壮絶な戦争でした。兵士を募り、男性だけでは足りずに女性にも

ポスターなどで呼びかけ、戦争に参加した女性（主に10代の少女）たちの証言は英雄視された男たちとは対照的な証言がならびます。

男物の下着でいるのが死よりも嫌だったり、生理がなくなったり、トイレに行きたくても男性のなかでは出来ずに氷のような川に飛び込んだり。赤いマフラーをまいていた為に撃たれてしまった少女狙撃手。ドイツ人に投げたら撃ってやると言われて乳飲み子を自分で地面に叩きつけたのち自殺する女性…。せっかく大釜いっぱいスープを作ったのに食べる人はみな死んでだれも帰ってこなかったり。両親が裏切り者だとされていたから、無茶な戦闘ばかり買って出て、両足をなくしてはじめて「やってこれで私のこと信じてもらえる」と泣く少女。500人以上の戦争体験女性の証言を聞き取ってまとめているのですが、「彼女たちは作り話をするよ」と男性作家に釘を刺されたり、「戦争の汚い部分しか描いていない」と検閲されたり。ロシア人兵士たちがドイツ人女性に乱暴する箇所や、指導部の方針に疑問をもった証言などはペレストロイカ以降やっと載せることができた部分。この本を読みながら、狙撃手は一人ひとり目撃者がいて計算する点数制だったな、と『同志少女～』の記述を思い出しました。スターリングラードの市街戦の激しさ、パルチザンの無残な死などは小説を読んでいないと想像するのが難しい箇所だと思います。そして戦後は、「まともな女は戦争なんか行かない」と白眼視され、戦争に行かなかった女性たちにいじめられた。男性は助けてもくれない。戦時中はかばってくれても、戦争が終わったら、花嫁には戦争に行っていない女を選んだ。都合よく国家に使い捨てにされた彼女たちの青春。軍でもらった勲章も隠して、人には見せないようにして、戦争の話も誰にも出来なかった。やっと知られるようになった女性から見た戦争の真実。決して人類が忘れてはいけない記録です。

